

# 乙女の碑

乙女の命と引き替えに 団の自決を止める為 若き娘の人柱 捧げて守る開拓団

次に生まれるその時は 平和の国に産まれたい 愛を育て慈しみ花咲く青春綴りたい

(「接待」を強いられた女性の詩「乙女の碑」より)

『私たちがどれほど辛く悲しい思いをしたか、私たちの犠牲で帰ってこれた  
ついでにとは覚えていて欲しい』 (「接待」を強いられた女性の言葉より)

根こそぎ動員で男たちを失った黒川開拓団は、子供、老人、女性たちだけで団を守つて  
いた。しかし、昭和二十年八月の敗戦とともにその生活は一変してしまつた。

日本の敗戦を知った現地住民の一斉蜂起とソ連軍の強姦と略奪に残された団員らは、  
悲報も届き、いつぞう追い詰められた黒川開拓団にも集団自決やむなしの声があがった。  
生きるか死ぬかを選ばされた団幹部は、生き抜くことを選んだ。

しかしそれは、陶頼昭に駐留していたソ連の将校に警護を依頼しその見返りとして  
将校を「接待」するという苦しい決断であつた。幹部は数えて十八歳以上の未婚の女性た  
ち十五人を集め、「兵隊さんとして行っている人の奥さん方には頼めん、ごつか頼む」  
として、ソ連軍将校に対する「接待役」を強いた。

女性たちは逃げたかつたが、団全体の生死が関わる事態に「嫌だ」とは言えず、交代で  
ソ連軍将校の相手をさせられた。ソ連軍の駐留した十一月頃まで「接待」は続いた。  
女性たちは、性病や発疹チフスへの感染を防ぐため、医務室で「手当」を受けた。  
しかし、十分な医薬品が無いために感染した四人が現地や引き揚げの途中で次々と亡く  
なつてしまつた。生きて帰れた女性たちも日本人への引き揚げ後も、恐怖は脳裡に焼きつき  
そのうえ中傷もされた…。そして、このことは戦後長く語り継がれることはなかつた。

昭和五十六年、遺族や元団員による慰霊団が旧満州を戦後初めて訪れ、「接待」の犠  
牲になつて現地で命を落とした女性四人を慰霊しようという話が持ち上がり、翌年三月十  
四日遺族会の浄財で「乙女の碑」を建立・序幕された。当時は犠牲になつた女性や家族  
の思いもあり、碑文をつくるにはできなかった。あれから三十六年がたち、私たちは後  
世に史実を伝えるため、ここに「碑文」をつくることに決意した。

戦後七十三年が経過した今、私たちの平穏で幸せな暮らしは、黒川開拓団を  
救つてくれた貴女たちの奪われた青春の犠牲の上に得られたものであることを  
あらためて深く胸に刻みます。

「二度と繰り返してはならない悲劇」私たちは後世に黒川開拓団の史実を正  
しく伝えるとともに、世界からあらゆる紛争、内戦、戦争が無くなるよう平和の  
大切さを伝えていきます。

平成三十年十一月十八日 旧満州黒川開拓団・黒川分村遺族会



# 黒川開拓団とは

昭和十一年八月、広田弘毅内閣は「満州農業移民百万戸移住計画」を重要国策として決定、  
昭和十一年以降、二十年計画百万戸五百万人の日本農業移民の大量送出計画を策定した。  
そして昭和十二年には分村移民方式を導入、疲弊している農村部へ推し進めた。

昭和十四年、当時黒川村村長は県議会議員も兼ねていた藤井紳一氏であつた。村の総面  
積の九割を山林が占め、瘦せた段々畑と傾斜の強い田圃で米、麦と養蚕を主体とした農業  
は、村全体の食糧自給に不足し、世帯およそ八百、人口四千弱のこの貧弱な村の将来を憂い  
た。藤井氏はかつて県議会議員も務めた政治家でもあつたことからいち早く国・県の施策  
の方向を窺り、多少とも有利に村の前途を資せん、県が推進する八百戸の満州移民計画  
にのっとり、黒川村に百五十戸の分村計画を立て推し進めようとした。

昭和十五年十一月、移民目標達成を前提として四人が現地(扶余県陶頼昭)を視察した。  
その後も村では、毎晩のように満州移民計画の会合が開かれたが、目標戸数には程遠い  
八十五戸がやっとであつた。そのため当時、経済状態が同じようであつた佐見村へも働き  
かけて佐見村で三十八戸、その他で六戸出来、総計百二十九戸・総数六百余人の満州開拓  
移民団が結成された。昭和十六年三月、黒川村として設営班五人を組織し現地設営に踏  
み切る。猟銃、刀を所持して陶頼昭へ到着したが現地の買収は終わつていなかった。満州開  
拓総局などと交渉し、ようやく四月三日現地へ足を踏み入れることが出来た。その連絡を  
受けて、四月十七日先遣隊として二十人が出発した。

その後、昭和十七年二月、本隊第一陣二百十七人、昭和十八年本隊第二陣、昭和十九年  
三月本隊第三陣が出発。黒川開拓団として体制が整つたのはこの年の四月であつた。  
入植地陶頼昭は、作物は良く育つ大変肥沃な土地であつた。しかしすでに開墾してある  
土地、住まいを現地住民から安く買い上げ、それは半ば強制的に買い上げたものだった。  
そのため開拓団は侵略者と思なされ反満抗日ゲリラの襲撃対象とされた。

黒川開拓団は、現地中国人の言葉を覚えて友好的な関係づくりを目指していたが、昭和  
二十年に入ると、根こそぎ動員で主力の男たちが召集されたため、不穏な空気が周辺に  
漂い始めていた。八月九日ソ連が満州へ侵攻してきた。そして敗戦。武器を持たない開拓  
団は恐怖に怯えた。黒川開拓団は旧本部和本部の二か所に集まり集団生活を始めた。それ  
でも止まない襲撃からの不安と不足する食糧の確保に生きるか死ぬかを選ばされた団  
は、生きて日本へ帰ることを決断した。

しかし、十分な食糧が足り無いた中、食糧不足による栄養不足と発疹チフスによって、弱  
い子供、老人たちが次々と亡くなつていった。翌昭和二十一年五月、情報収集のため出発  
した先遣隊が戻らないまま、八月十三日引き揚げが始まつているとの情報を得た本隊は、  
陶頼昭を離れ、松花江に架かる鉄橋が落とされたため、雨の中を歩き通し二晩野宿し  
て松花江を船で渡ることが出来た。そして更に線路沿いを歩き続け、やっとの思いで徳恵  
駅に辿り着き、新京(現長春)行の汽車に乗ることが出来た。この間、四泊五日の野宿、強  
行軍の逃避行は人間としての窮極、疲弊は頂点に達した。その後、新京では第一陣が昭和  
二十一年八月に出発、第二陣は難民として九月に出発し、胡蘆島より博多港に向けて出発。  
その年の十月七日の生還者をもつて引き揚げ終了となつた。陶頼昭を出発して郷里の土を  
踏む迄の間一カ月余りに二十七人の犠牲者を出した。黒川開拓団は六百八十二人のうち  
二百八人が死亡、残留孤児三人を中国に残し、再び故郷の土を踏んだのは四百五十一人、  
黒川開拓団の五カ年に及ぶ長い旅は終わった。

一部岐阜県満州開拓史参照

# いつまでも平和がつづきますように

満州国と「五族協和」「王道楽土」とは

満州国は、満州事変を機に生まれ、太平洋戦争終結にともない消滅した「国家」で  
ある。存続期間は、昭和七年(1932)3月1日から昭和二十年8月18日までの13年5ヶ月。  
現在の遼寧省、吉林省、黒竜江省の東北三省に内蒙古の東北部を加えたエリアに  
あたる。面積は、約23万3400km<sup>2</sup>。今の日本のおよそ3倍で、北海道と同じ湿潤大  
陸性気候であり、夏は暑く、冬は長く厳しく続く。国旗は黄色地の左肩に赤、青、白、  
黒の横線を記した「新五色旗」、首都は新京(現在の長春)、国号は「五族協和」「王  
道楽土」日本人、漢人、満州人、朝鮮人、蒙古人の五族が協和しあい、儒教の仁で統  
治する「王道」によって、理想の国として楽土を築こうというスローガンである。

しかし、現実には日本の武力侵略であり、傀儡国家を正当化するための大義名分に過  
ぎなかつた。入植地は武力を背景とした強制接収であり、一部を除き「開拓」とは名は  
かりの既聖地であり、そこは協和すべき人たちが直前まで住んでいた家屋であつた。

関東軍は自国民を守る軍隊ではなかつたのか

日露戦争でロシアを破った日本は、長春から旅順を結ぶ東清鉄道南部支線(後の満  
州鉄道)を譲り受け、鉄道1kmごとに15名以下の守備兵を配置する権利を認めさせ  
た。兵の総計は2万4400人以下であつた。その後ソ連軍の脅威が認識されたこと  
などにより関東軍は漸次増強され、1937年の日中戦争勃発後は、続々と中国本土  
に兵力を投入し、1941年には一時的に関東軍は74万人以上に達した。太平洋戦争  
の戦況が悪化した1943年以降、重点は東南アジア(南方方面)に移り、関東軍は戦  
力を抽出・転用された。その理のむせに1945年になると在留邦人及び開拓移民  
を対象にいわゆる「根こそぎ動員」で25万人を召集し、7月末までに兵員78万人、  
飛行機230機をそろえた。だがこれらの部隊は「張子の虎」で練度、装備、士気な  
どあらゆる点で以前よりはるかに劣っており、満州防衛に必要な戦力には至って  
いなかった。その実力を知る関東軍首脳は、ソ連軍侵攻の場合には大連~新京~  
図們江を結ぶ南側だけを防衛することにした。北部満州、西部満州の実質的な放棄  
であり、関東軍はそこに居住する開拓団には知らせなかつたし、疎開させようとし  
なかつた。1945年8月9日、ソ連は日ソ中立条約を一方向的に破棄し対日参戦。  
満州に侵攻してきたソ連軍に対し、10日大本営は朝鮮防衛と司令部の移転を命じ  
た。14日、関東軍司令部は通化に移転。これによって関東軍は「開拓移民を見捨て  
て逃げ出した」と後に非難されることとなった。圧倒的な兵力と火力を持つソ連軍  
は、猛烈な勢いで満州の中枢部を進撃し続け関東軍は後退、そして敗戦。守るべき  
関東軍がいなくなった開拓民は、相次ぐソ連兵による略奪・暴行にさらに苦難にさら  
された。地方の開拓民だけでなく新京などにいた商人や一般人さえも終戦の事  
実は知らされずに取り残された。このことが多くの悲劇を生む要因となつた。

満蒙開拓の苦難の実態とは

当初の目的は、農村恐慌に喘ぐ内地農村の救済と開拓民に満州国の治安維持と対  
ソ連戦に備える屯田兵の役割を担わせることである。移民数は全国では約27万人  
とも32万人とも言われている。最も多いのが長野県37,859人、岐阜県は7番目で  
12,090人。入植地の6割は、漢人や朝鮮人が開墾した土地を強制的に安く買い上げ  
たものだった。多くの開拓団はソ連(ロシア)国境沿いに配置され、満州の権益を争  
うソ連や抗日勢力に対して『人の盾』とする目的があつたとされる。昭和20年満州  
にも根こそぎ動員勢が敷かれ25万人が召集される。男手を奪われた開拓村に8  
月9日突如のソ連軍が侵攻。女子供は逃避行の過程で病気や戦禍、地元民による襲  
撃。そして集団自決により8万人が死亡、1万人の残留孤児や残留婦人を後に、日本  
へ帰国できた者は11万人余りだったと言われる。